# 子どもが意欲的に学びに向かう授業を目指して

高度学校教育実践専攻
教員養成特別コース
実習責任教員　川上　綾子
前川　諒平　　実習指導教員　木下　光二

*キーワード：アクティブラーニング，主体的・対話的で深い学びのある授業，学習意欲*

## １，自己の経験と大学院授業に基づく課題設定

### （１）課題設定について

筆者は，当初「アクティブラーニング」に着目していた。「アクティブラーニング」は，従来のように学びを一方的に児童に押しつけるのではなく，学んでいる内容について思考する力を大切にしている。この学んでいる内容について思考する力，すなわち学んでいる内容に対して自分の主張やそれ以外の様々な視点から考える力の育成につながることは，将来，児童が直面する変化する社会に対して柔軟に対応できる「生きる力」につながると思い，アクティブラーニングのある授業を目指した。

### （２）教職協働力実践演習での取り組み

筆者は，第５学年の面積についての学習の全１３時間中の５時間目を行うこととなった。

しかし，導入部分で行う発問が完成しなかったので，授業の「展開」と「まとめ」まで考えることができず，アクティブラーニングの要素のある授業は行えないと判断して，本時で学ぶ知識を着実に身につけられることを意識した授業を行うことに考えをシフトした。

### （３）教職協働力実践演習の成果と課題

発問の練り上げを行うことは，筆者の現時点での能力では難しいと判断した。教職協働力実践演習の経験から，「生きる力」の育成のための授業を元来のアクティブラーニングにより目指すのではなく別の方法で目指すほうが良いと感じた。

## ２，基礎インターンシップ

### （１）課題設定について

基礎インターンシップでは「生きる力」を育てる授業を目指して，「主体的・対話的で深い学びのある授業」に着目し，その実現のためには児童が「主体的に学ぶ」ことが土台として必要だと考えた。主体的に学ぶことで，児童は学習に対して意欲的に取り組めたり，学びに対して自分の考えをもちながら取り組めるであろうことと，「主体的」に学ぶことは，対話に必要な目的をもつことにつながっており，対話を行う意欲も高められると考えたからである。

### （２）授業実践について

筆者は児童に「主体的に学ばせたい」という思いから，様々な科目で児童の興味関心を引く工夫を試みた。導入部分で本時の内容に対して興味を引くような生活に関する話題や楽しい取り組みを持ち出して学習を展開することを意識し，児童が楽しく学習に取り組めるような活動を計画した。表１はそれらをまとめたものである。

実践の結果，児童の興味関心を持続したまま授業を行うことは難しいと分かった。その打開として「２重構造」と「幼少接続」の視点が大

切になると考えた。

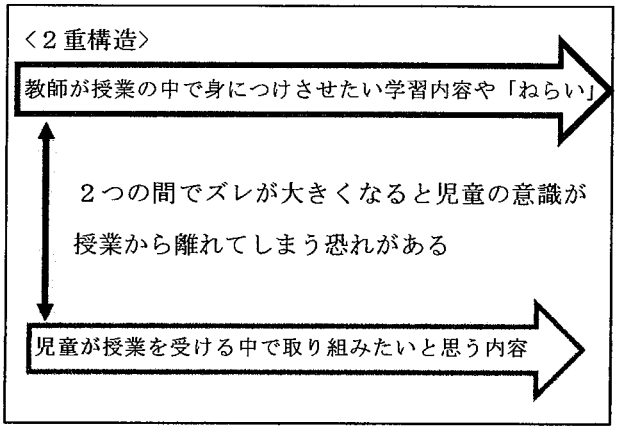
表１　各授業における「主体的な学びを狙った活動」

| 教科 | 単元名 | 主体的な学びを狙った活動 |
|---|---|---|
| 算数 | 倍の大きさ | 身の回りにあるモノが登場する問題 |
| 国語 | 修飾語 | 文を詳しくする遊び |
| 理科 | 光の大きさ | 鏡の性質を利用した遊び |
| 道徳 | じゃがいもの歌 | 生活経験に関する質問，問題提起 |
| 図工 | お話をかこう | 文から話の様子を想像する活動 |

（３）２重構造について

担任の先生との話を通して筆者は授業における「２重構造」について以下のように考えた。

図１　授業における「２重構造」




「教師が学ばせたいこと」と「児童の行いたいこと」を一致させることは難しい。児童の中で，椅子に座り１日中勉学に励みたいという気持ちよりも，勉強以外のことがしたくなる気持ちが強くなるのは必然的である。様々な要因から，教師の行う授業に取り組む気持ちが薄れてしまう。そのような児童の気持ちを教師がくみ取らずに授業を行えば，たとえ表面的には授業を受けていても，児童の意識は授業内容から遠ざかってしまう。

（４）幼小接続について

幼児教育はコーチングで初等教育はティーチングと言われている。その移行が急であると，対応できる子どもとそうでない子どもの学びに差が出てしまったり，ストレス等，意欲の低下につながると考えられる。また，このことから，各学年の間で習っていることの連続性を踏まえて授業を行う必要があると感じた。ただ単に本時で学習する内容についてのみ準備するのではなく，その時間に学習する内容と関連のあることを，児童はいつ学びどのようなプロセスで身につけたのかを調べ，そのプロセスと繋がった授業を準備することで，児童にとって今後も学びが続いていくのではないだろうか。また，教師がこういった配慮を行うなかで，児童の実態についても知ることができるだろうだろう。

３，総合インターンシップ

（１）課題設定と授業実践について

総合インターンシップでは，基礎インターンシップでの学びを踏まえ，「興味関心を引く」ことから児童の持つ「したい」と思う気持ちを大切にしつつ，第３学年算数「円と球の単元」，全８時間の７時間目に取り組んだ。本時では，これまでの考察や基礎インターンシップでの経験を踏まえて，比べる・探す・調べる活動を中心とした授業を計画した。導入部分では，球と円に見えるモノを様々な視点から観察し，比べることで違いを見つけて球の性質に気がつく活動，次に，教室の中で球や円に見えるモノを実際に探してみる活動，そして粘土を実際に切りながら答えを模索する調べる活動を行うこととした。これらの活動を順に展開していく授業構成とすることで，児童が興味・関心をもち，それぞれの活動に積極的に取り組みながら，学習意欲の維持も図れるのではないかと考えた。

（２）授業実践の成果と課題

今回の授業実践では一定の成果をあげたと考える。このように判断した要因は以下のような

点にある。

①授業中の児童の取り組みの様子

児童が授業中にノート・プリントを書く様子や，設定された活動への取り組みに対して感じたことである。机間指導や教師の発問に対する応答などの観察から，児童らはとても熱心に取り組んでいたと感じた。

②学習した内容を授業外で活用する児童の姿の発見

授業後の給食の時間の際，ご飯を丸めておにぎりを作る児童がいた。この児童に作ったおにぎりの形について質問すると，自然と児童の間で筆者の行った授業の知識を使い議論が起こり，授業内で行った活動と同じ方法で児童がおにぎりの形を調べた。この一連の行動や児童の発言から，授業で行った活動が印象的であったことと，知識の定着があった児童の存在が確認できた。また，算数の授業での活動を想起しながら，生活で起こった事象を算数的な視点で捉え考えようとしている姿は，筆者の行った授業の影響もあったのではないかと考える。

③授業を参観してくださった先生方からの講評

講評の中で，児童が熱心に授業に取り組んでいたという感想を複数の先生からいただけた。また，次のような，筆者が授業の中で扱う言葉を細かく説明する機会を設けていたことも評価された。授業のなかで出てくる言葉には，「切り口」といった，教科書には使われるが児童にはなじみのない言葉があった。そのような場合，切り口は切ったモノの断面図であると漠然と説明するのではなく，お菓子の入っていた蓋がついている円柱の缶を用い，その缶を切った時にできる形が切り口であることを説明して，蓋を缶から引き離し疑似的に提示した。こうした，児童の実態を踏まえ理解を促すために行った支援が，今回の授業の結果に結びついたと考える。

4，今後に向けて

（1）学びの成果

筆者は2年間の中で上記に述べたような取り組みを通し，それぞれに学びの成果を得てきたが，振り返ると，直接「生きる力」が身につく授業を探究したというよりも，「生きる力」を育てる授業を行うにあたって，どのようにすれば児童が学習内容だけでなく，何事にも興味関心を持ち，楽しんで学びを進めることができるのかについて考えていたように思う。基礎インターンシップにおける児童が興味関心を持てるような手立て，総合インターンシップにおける授業の中での児童の盛り上がり，学習のなかのつまずきを支援する視点，主体的に取り組めるような手立て。これらの手立てや視点は，教師の行う授業に対して児童が意欲的に取り組めるという点に重きを置いていたと考えている。

そのため，最終成果として筆者がまとめる内容は，「主体的な学び」に向けた授業実践というよりも，「子どもが意欲的に学びに向かう授業」を目指して行われた授業実践であると考えた。

（2）子どもが意欲的に学ぶ授業

子どもが意欲的に学べることは，どんな時代でも普遍的に大切にしなくてはならないだろう。それは，筆者が，講義型の授業や他の形式の授業など，授業の形態にかかわらずどんな時でも，子どもの気持ちの根底に意欲がなければ，学びとして成立しないと考えているからである。もう，他律的に知識を詰め込む学びは古くなってきている。子どもが自ら学ぶ姿勢が評価され，自ら興味関心を持って粘り強く取り組む学びが良いと考えられているからこそ，「主体的な学び」につながる，「子どもが意欲的に学べる」ことが大切

なのではないだろうかと考えた。

そして，児童が授業に対して「意欲的」に取り組むためには，以下のような３つの要素が重要であり，授業においてはその３つの要素がいずれも欠けずに含まれている必要があると考えた。

Ⅰ　児童が自ら学ぶ原動力を活かした手立て

櫻井（2020）は，「主体的に学習に取り組む態度」の源には「自ら学ぶ意欲」があり，個の意欲に対して，喚起したり欲求を充足したりすることが大切であるという。そして，小学校低学年までは，「内発的な学習意欲」が中心，高学年くらいからは，それとともに「自己実現への学習意欲」が重要になってくると述べている。これは，筆者が基礎インターンシップで考察していた児童分析の結果と似ていた。したがって，授業を計画するに当たって，児童の原動力となる心理を学年に応じて刺激する手立てが必要であると考えている。

Ⅱ　児童が授業に取り組む中でつまずかないための手立て

児童にとっては，授業の中で教師の意図と反して学習に対して取り組みたくなくなってしまう場面があると思う。そのような場面を予測し，児童の実態に応じて必要な支援を企てなければいけない。かといって過保護的にどんなことも教師が支援を行いながら学習を進めてしまうと，児童の成長する機会を失くしてしまうこともあるだろう。したがって，教師が計画したり行ったりした支援が本当の意味の支援になり，児童の学ぶ機会を減らしてしまうことにはならないのか吟味しなくてはいけない。

Ⅲ　教師の用意した手立てに児童を引き込む工夫，仕掛け

「学ぶ原動力」を意識した手立てをそのまま児童に提供するだけでは，児童を学びに引き込むことができないということである。総合インターンシップで行った筆者の算数の授業の改善として，活動を押し付けてしまった点がある。この活動自体は，児童が興味関心をもって取り組める活動だったかもしれないが，その活動に引き込む手立てが足りなかった。児童が意欲的に取り組める手立てを準備し，さらに，その手立てに引き込む工夫まで忘れずに授業の計画を立てていきたい。

（３）今後に向けて

大学院での２年間の学びを今後に活かすならば，授業実践で得た「成果」よりも，「課題」を通して身につけた思考の仕方や，現職院生との交流や現場の先生との関わりから自分の問題に対して取り組んだ経験を大切にしたいと思う。筆者が参考にしていた文献の中にも，教師の授業力と教師の豊かな人間性の関係について言及しているケースがいくつかあった。

教師としての授業力を上げることを意識しながらも，様々な視点から物事を考察していく姿勢を忘れず，問題に対して自己の中での対話だけでなく他者との対話ができる環境を作り，何事にも深く粘り強く取り組み，人間として豊かな教師を目指したい。滋賀大学教育学部附属小学校（2005）は，「子どもの学ぼうとする力を引き出すには，まず，教師自身が『学ぼうとする力』にあふれていることが大事である。」と述べている。筆者は「子どもが意欲的に学びに向かう授業」を目指している。ならば，筆者自身も，自分の学びに対して今後も「意欲的に向かう」ことを忘れずに大事にしていきたい。